

文化的に多様な背景をもつ就学前の子どもの家庭における 教育的関わりへの援助：オーストラリアの事例から

林 悠子

神戸松蔭女子学院大学教育学部

Author's E-mail Address: y-hayashi@shoin.ac.jp

Aid for Educational Engagement in the Homes of Pre-school Children with Diverse Cultural Backgrounds: A Case Study from Australia

HAYASHI Yuko

Faculty of Education, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本稿の目的は、文化的に多様な背景をもつ就学前の子どもの¹⁾家庭における教育的関わり²⁾の充実に向け、実践の蓄積があるオーストラリアの取り組みから示唆を得ることである。オーストラリアでは、教育格差是正を目的とし、先住民や英語以外の言語が家庭での主要言語である家庭など、社会経済的に不利な状況にある就学前の子どものいる家庭を対象とした教育プログラム、Home Interaction Program for Parents and Youngsters (HIPPPY) が実践されている。HIPPPY 導入の実際を文献により検討した結果、HIPPPY を導入する前提となる援助観、HIPPPY の特徴である国の保育カリキュラムガイドラインに対応したプログラムおよび家庭訪問とチューター制度は、子どもの就学に向けた認知能力の発達のみならず、保護者の自信や地域への帰属感醸成、就学前の教育支援を地域全体で向上させる可能性など、子ども教育を中心に据えた連携の形であることが明らかになった。これらは日本における文化的に多様な背景をもつ子どもの家庭での教育的関わり³⁾の仕組みを構築するための連携のありかたを考えるうえで重要な示唆となり得ることが考察できた。

The purpose of this paper is to draw suggestions from Australia's efforts to enhance educational engagement in the homes of families with preschool children with diverse cultural backgrounds. In Australia, the Home Interaction Program for Parents and Youngsters (HIPPPY) is practiced with the aim of reducing educational disparities in the country. The HIPPPY is an educational program for socioeconomically disadvantaged families with preschool children, such as indigenous families and

families where a language other than English is the primary language spoken at home. A review of the literature on the implementation of HIPPY illustrates that the view of assistance as a prerequisite for its implementation, the programs that correspond to the national curriculum guidelines, and the home visits and tutoring programs are effective not only in developing children's cognitive abilities in preparation for school, but also have the potential to improve parents' confidence and their sense of belonging to the community. In addition, the program also improves early childhood education support for the entire community. These findings provide important insights into how to build a system of educational support for children with foreign connections in Japan.

キーワード：多様な文化的背景をもつ子ども、家庭での教育、オーストラリア、HIPPY

Keywords: children with Diverse Cultural Background, Educational Engagement at home, Australia, HIPPY

1. 問題と目的

保育の質向上の議論において、保育者と保護者の連携は質向上の鍵となる要素の一つであるとされている（OECD、2019）。OECDの保育白書 *Starting Strong* において、保育者と保護者との連携は *Partnership* と表されており、子どもの教育に関する連携の必要性が指摘されている（OECD、2019）。林（2020b）では、文化的に多様な背景をもつ子どもの保育における家庭との連携の現状と課題について、林（2021）では、文化的に多様な背景をもつ子どもの言語発達の観点からの家庭との連携について、それぞれ検討した。その結果、文化的に多様な背景をもつ子どもの保育においては、保育者は子どもと家族の文化に積極的関心を持ち、子どもと保護者が安心して保育に参加できる実践が求められること、言語発達を中心とした認知能力発達の観点から家庭における教育的関わりが必要であることが指摘できた。本稿では、文化的に多様な背景を持つ子どもの家庭での教育的関わりに焦点を当て、その充実を図るための方策を探りたい。

現在、地域の子育て家庭をめぐる課題として、支援ニーズの把握が不十分であること、サービスが不足していること、サービスのマネジメント体制が不十分であることが指摘されている（厚生労働省子ども家庭局保育課、2021）。厚生労働省「地域における保育所・保育士等の在り方に関する検討会」（2021年5月から7回開催）においては、地域性を考慮した保育のあり方が議論されている（厚生労働省、2021）。論点の一つには、多様なニーズを抱えた保護者・子どもへの支援が取り上げられている。多様なニーズの中には、「配慮が必要な児童への支援」として、医療的ケア児、障害児、外国籍の児童が位置付けられている。また、地域の子育て家庭の孤立の深刻な現状を受け、保育所・保育士による地域の子育て支援機能の強化が必要とされており、地域支援の役割がより一層求められる。地域のニーズに応じた子育て支援の先進事例として、子育て世帯が身近な保育施設に登録し育児相談等のつながりを持つ仕組みや、1歳未満児の子育て世帯への訪問（保護者ヘルパー）制度、就学児童への居場所提供や学習支援などが紹介されている（厚生労働省、2021）。学習支援等学童に対する教育的支援は地域の中で広がりを見せつつあるが、就学前では保護者の育児孤立を防ぐため

の相談にとどまっているのが現状であると言える。特に、配慮の必要な子どもの家庭への支援については、課題は認識されているもののきめ細かな実践には至っていない現状である。

林 (2021) で確認した通り、文化的に多様な背景を持つ子どもの保護者と保育者の連携は、持ち物の連絡など事務的事項のやりとりが中心となり、子どもの教育の観点からの連携が十分に行われているとは言い難い。家庭での教育的関わりの充実が必要であるものの、保護者の多忙な生活状況や資源不足により十分な関わりが行えない現実があることから、支援体制の整備が求められる。そこで本稿では、文化的に多様な背景を持つ就学前の子どもの家庭における教育的関わりの方策の手掛かりとして、その実践蓄積のあるオーストラリアに注目し、家庭での教育的関わりを支援する取り組み事例に関する文献から示唆を見出すことを目的とする。

2. オーストラリアの家庭教育支援プログラム The Hone Interaction Program for Parents and Youngsters (HIPPY)

(1) 概要

オーストラリアの就学前保育施設では、国のカリキュラムガイドラインおよび保育の質評価基準において、子どもと家族の多様な文化を尊重し保育に反映させることが求められている (林, 2020a)。家庭を対象とした就学前の教育支援としては、社会経済的に不利な地域の子どもの家庭における就学前の教育プログラム The Hone Interaction Program for Parents and Youngsters (以下、「HIPPY」とする) を運営している。本プログラムの実施対象の中には、文化的に多様な背景を持つ家庭が含まれていることから、本節では同プログラムに注目し、概要を整理する。

HIPPY はイスラエルで誕生した家庭での子どもの認知的、社会的、情緒的、身体的発達を促すプログラムである。現在世界 15 か国で運営されている。就学前の子どもへの家庭における教育的関わりを支援を行うことを目的としている。イスラエルのヘブライ大学の研究者 Lombard は、北アフリカやアジアからの移民の子どもたちは就学前施設に通っていたにもかかわらず他の子どもよりも学業達成が低いことを踏まえ、就学前の家庭教育の方法を開発し、家庭における教育的環境の充実と保護者が家庭教育に対して自己肯定感を持てることの両方を促進する実践が行われるようになった (HIPPY International HP)。

HIPPY は、2 歳から 5 歳の子どもの保護者を対象とし、物語やアクティビティの本・教材を活用し、同じ地域内でのチューターが家庭を訪問して保護者とともに実践する取り組みである。読む、書く、描く、歌う、リズム活動、ゲーム、パズル、料理など多岐に渡る活動が盛り込まれている。HIPPY の最大の特徴は、チューターが家庭訪問し、保護者と子どもに直接関わりながら進めるところにある。社会資源の利用が困難な保護者や地域的に支援の資源が乏しい地域等の保護者にもプログラムの実践が可能となる仕組みが作られている。

2017 年には HIPPY の 50 年の実践を評価する研究が発表され、実施 7 か国の 26 の研究成果レビューから、HIPPY の子どもへのポジティブな効果があることを示している (行動、言語、数の分野)。言語と行動についてはプログラム実施後間もない期間での効果が見られ、数に関

しては1年後にも効果が継続していることが明らかにされている。子どもへの効果だけでなく、保護者の自己肯定感や行動への効果、例えば子どもへの読み聞かせ機会の増加や虐待の減少などの効果もたらされることも示されている。さらに、HIPPYは単独での実施ではなく、保育施設での関わりと連動することで効果が高まることも示されている (Goldstein, 2017)。

現在オーストラリアでは、Department of Social Services (社会サービス省) が、HIPPYの管轄省である。子育て支援策の一環として位置付けられており、2014年から2022年に100の地域を対象として160億ドルの予算が配分されている。現在は2019年から2022年のガイドラインに則り運用されている (Australian Government Department of Social Services, 2019)。プログラムの目的は、特に社会経済的に不利な地域の子どもの就学前の子どもの家庭での教育的関わりを通して子どもの就学への準備を促すことと、保護者の自信やスキルを向上させること、家庭訪問指導者システムによる地域雇用の促進などである。2008年に国の政策の一環として位置付けられる以前から、オーストラリアでは非営利組織のThe Brotherhood of St. Laurence (BSL) がHIPPYの国際組織 (HIPPY International) から運営資格を認定され、1998年からHIPPYを導入していた。乳幼児期への国の投資を増大させる方針のもと、連邦政府が家庭での教育プログラムとしてHIPPYを位置付けることとなった。2009年連邦政府は乳幼児期への投資方針「The National Early Childhood Development Strategy-Investing in the Early Years」を策定した。すべての子どもにとっての人生の始まりが最善のものとなることを目指す同方針とHIPPYの目的が一致することが確認されている (Liddell et al., 2011)。

社会経済的に不利な地域を中心に、各地域の非営利団体がプログラムを運営している。2018年以降、全国100の地域で実施されその半数が先住民であるアボリジニとトレス海峡諸島民の居住地域である。HIPPYの目的は以下の5点である。①子どもに、家庭での構造化された教育プログラムを提供する、②就学準備と学校への参加を充実させる、③家庭での積極的な学びの環境作りのために保護者や養育者が自信と技術を身に着けられるようにする、④HIPPYコーディネイター、チューター、保護者にとっての雇用や地域でのリーダーシップを援助すること、⑤地域の力を強めること。子どもへの利益として示されているのは、以下の6点である。①学びを愛することを促す、②学校で楽しくうまく過ごす機会を高める、③言葉、数、聞くことのスキルを促進する、④集中力や運動能力の向上、⑤学びにおける自己肯定感や自信を育む、⑥保護者と子どものコミュニケーションを良くする。保護者 (家庭) への利益は以下のように示されている。①家庭で学びの環境作りを支援する、②子どもの発達と学びの道筋についての保護者の知識を増やす、③保護者が子どもとのポジティブな時間を過ごす機会を提供する、④保護者が子どもの教育に積極的に関与できるようにする、⑤保護者が地域と定期的に出会う機会や地域に属している・つながっている実感を持てるよう支援する、⑥保護者の自己肯定感を高める、⑦家族関係全体へのポジティブな影響をもたらす、⑧地域の雇用や職業訓練の機会を提供する (Australian Government Department of Social Services, 2019)。

(2) HIPPY プログラムの実践

HIPPY プログラムの特徴は、就学前の2年間にわたる家庭での教育プログラムであること、学びのツールとしてのロールプレイ、保護者・養育者がホームチューターの役割を担うこと、家庭訪問と保護者のグループ作りのしくみ、毎日学ぶことができる機会、の5つである。プログラムは国の保育カリキュラムガイドライン (The Early Years Learning Framework) の内容に基づいている。1年目は、8冊の物語の本と、言語、数、運動技術などに関する30種の活動が届けられ毎週実践できる。2年目は7冊の本と、隔週での15種のプログラムと保護者に向けた子どもの学びと発達の情報が提供される。それぞれの活動は15分程度のもので週5～6日実施する。地域において実際に運営するのは自治体と連携した地域の非営利組織である。高等教育を受けたコーディネイターと、コーディネイターのもとトレーニングを受けたホームチューターチームが実践を担う。当該地域の住民がホームチューターとなり、家庭訪問によりプログラムを届け、保護者のプログラム実践をサポートし記録を取る役割を担っている (HIPPY Australia HP)。

HIPPY は無料で利用できるプログラムである。地域のコーディネイターに連絡し申し込み資格があれば利用が可能である。申し込み資格は、翌年に就学予定の子どもがいること、プログラムが運営されている地域に居住していることである。2019年以降、より必要性の高い家庭として、以下の対象が設定されている。①一定の所得以下の世帯が有する「ヘルスケアカード」所持家庭、②アボリジニおよびトレス海峡諸島民の子ども、③家庭以外での養育を受けている子ども、④無収入または政府の経済的援助で生計を立てている世帯、⑤ひとり親家庭、⑥保護者以外の養育者のもとで生活する子ども、⑦英語以外が家庭での主な言語の子ども (HIPPY Australia HP)。

(3) HIPPY の効果研究

HIPPY 導入時から、プログラム参加による効果について研究がなされてきた。子どもの認知能力、保護者の教育的関わりの向上とともに、チューター制度による地域のネットワークや雇用機会の創出も指摘されている (Brotherhood of St. Laurence, 2008, Tapper & Phillimore, 2012, Bryant, 2015)。

Barnett et al. (2012) の2年間の追跡調査では、子どもの認知能力と社会情動的調整、保護者の自己効力感、養育スタイル、家庭の学びの環境、保護者の地域でのつながりなどに多くの良い影響がもたらされたことが明らかになった。HIPPY の利用者は社会経済的に不利な家庭であるが、今後、社会の不平等を減少させるためにはより多くの支援を必要とする保護者と子どもが保育の場につながりを持つことが必要であると指摘されている。

近年の追跡調査では、HIPPY の運営母体 Brotherhood of St. Laurence による HIPPY Longitudinal Study が実施されている。2016年から2017年、2017年から2018年の2つの追跡による667家族の調査を実施している。本調査で、HIPPY への参加による効果は次のように明らかになっている。子どもに関しては、子どもの言語と数のスキルのアセスメント調査ではプログラム開始時点ではオーストラリアの中央値を下回っていたが終了時点で上回ったこ

と、子どもの就学への準備や学びを楽しむことについて90%以上の保護者が認識していることが明らかになった。保護者については、例えば50%以上の保護者が週5~7回の読み聞かせをするなど、家庭で教育的関わりを行う機会が増えたことが示されている。さらに、ホームチューター制度により女性や先住民の将来的な就労機会の拡大へ貢献していることも明らかになった。このようにHIPPYへの参加により、子ども、保護者、地域全体への還元がなされることが明らかになっている (Brotherhood of St. Laurence, 2021)。

先住民にとってのHIPPY参加については、HIPPYの活動プログラムは西洋文化が基盤となっていることから、先住民の文化に即したプログラムの作成の必要性も指摘されている (Jacyntha Marie Krakouer, 2016)。HIPPY導入当初から子どもとその家族にとっての実践効果が継続的に明らかにされており、実践の意義が評価されていることが読み取れる。一方、保育施設との連携や先住民文化の尊重のあり方など、実践により見出されてきた具体的な課題も指摘されるなど、地域資源との連携および利用者へ即した一層の改善が望まれていると言える。

3. 日本語における文化的に多様な背景を持つ子どもの家庭での教育的関わりへの支援に向けた示唆

オーストラリアのHIPPYの実践は、子どもの認知能力の発達を促すとともに、保護者の家庭教育への自信をもたらす、家庭での教育環境を主体的に構成する力を育むこと、チューター制度により、保護者にとってもチューターにとっても地域への帰属感や関係性が強まることで視野に入れられた実践であることが確認できた。実践の対象は社会経済的に不利な状況にある家庭であり、2019年には優先的実践対象がより具体的に示されたが、その中に、本稿における文化的に多様な背景を持つ子どもの家庭にも該当する、英語以外の言語が家庭での主要言語である家庭が位置付けられている。林 (2021) では文化的に多様な背景を持つ子どもの言語発達の観点から家庭での教育的関わりが重要であることを確認した。だが、家庭での教育的関わりへの当事者である保護者の状況を考える時、すべての保護者が教育的関わりへの必要性を理解し、実践するための方法を備えているわけではない。また、保護者自身が、地域での帰属感や関係性を必要とする状況にある。HIPPYの活用は、文化的に多様な背景を持つ子どもの家族が、今生活している地域が彼らの居場所である実感を持てる機会の一つになり得る。保護者自身が地域において安心して生活できる基盤があってこそ、家庭での子どもへの教育的関わりへの促進を図ることができるだろう。英語以外を主要言語とする家庭に対するHIPPYプログラムの展開の具体的な内容については今回情報が得られなかったため、今後その詳細を知る必要がある。

日本において、文化的に多様な背景を持つ人々の生活においては様々な困難があるとされている ((株)富士通総研, 2019)。行政による言語や生活支援の取り組みは各自自治体等で行われているが、その多くは制度説明やサービス利用の説明、子どもの健康に関する情報などの多言語での提供などであり (例えば、かながわ国際交流財団)、家庭での教育の充実は今後の取り組み課題としての認識にとどまっている状態である。林 (2021) で指摘したように、

特に就学前の子どもについては十分な支援が展開されていない。在留外国人の居住率の高い自治体でのプレスクール事業の実施等が見られるが、その内容は就学に向けた日本語学習や小学校文化の学習が主である（例えば、愛知県プレスクール事業など）。言語発達を含めた認知能力発達と子どものアイデンティティ形成や文化の継承の視点から、乳幼児期の教育的支援が必要である。HIPPY の内容から、日本における文化的に多様な背景を持つ子どもの家庭での教育的関わりへの支援充実に向け、以下の示唆点が見出せる。第一に、国の保育カリキュラムガイドラインおよび保育の質基準の内容が反映されたプログラムであること、第二に、基盤となる援助観、第三に家庭訪問制度とチューター制度である。

(1) 国の保育カリキュラムガイドラインおよび保育の質基準が反映されたプログラム

国のカリキュラムガイドラインにおける「原則」・「実践」・「学びの成果」3構成要素と、保育の質基準（National Quality Standards）の内容が、家庭での教育プログラムに反映されることによって、子どもは保育施設と家庭双方での一貫した教育方針のもと学ぶことが可能になる。子どもの生活の連続性を考えれば教育的関わりの方針の一貫性は不可欠である。カリキュラムガイドラインと質基準に基づいた内容が家庭で実施しやすいように一日に10分から15分程度の活動として設計され、家庭での継続性が考慮されている。HIPPY プログラム実践のためのガイドラインでは、最初に子どもの権利条約、カリキュラムガイドライン、保育の質基準、州法と国の子どもの安全原則についての理解が求められている（Brotherhood of St. Laurence, 2020）。今回その具体的活動の詳細情報が入手できなかったが、今後プログラム内容とカリキュラムガイドライン内容の整合性についても確認したい。家庭と保育施設での教育内容の一貫性の維持とともに、子どもの教育の専門家である保育者との連携も視野に入ると、保護者と保育者がHIPPYの内容を共有し、家庭での学びの内容が保育の場でも還元されるサイクルが生まれると、子どもにとってはより一層一貫した学びが実現するのではないだろうか。

(2) 基盤となる援助観

HIPPY は社会経済的に不利な状況にある家庭の子どもをその対象の中心としている。対象のひとつである先住民の子どもと家族への教育的支援はオーストラリア社会における課題の一つである。国際的に良質な保育への参加がその後の学業達成や人生へのポジティブな影響をもたらすことが認識される中、先住民の子どもの学業達成と就学前施設利用率は先住民以外の子どもより低いことから、教育格差是かつ保育の質向上の取組の一環として、先住民の子どもの就学前教育の充実が図られようとしている（Moyle, K., 2019）。

オーストラリアの教育支援の基盤となる援助観はストレンクス視点である。先住民の子どもと家族にとって、オーストラリアで有力である西洋の教育観に基づいた教育システムは異なる文化の経験であることを踏まえ、彼らが犠牲者あるいは無力だという捉え方よりも、能力があり行為主体であるという理解にもとづいた援助観である。この援助観のもとHIPPYが導入され、地域において家庭での教育的関わりを中心とする保護者の持つ可能性を引き出し

子どもの教育に主体的に関わることを促している。ストレンクス視点はソーシャルワークの分野で適用されている援助観であるが（長崎、2013）、先住民の子どもと家族の教育的支援は、子どもの就学準備を中心としながら家庭において子どもの教育を行う保護者の力を引き出し地域住民の関係を深める、教育と福祉双方に重なる内容であり、ストレンクス視点による実践が援助の質を高めることにつながる。保護者を単なる支援の対象にとどめるのではなく、OECD（2019）が言う、ともに子どもの育ちを支えるパートナーシップがより発揮できる関係性が望まれる。石井他による多文化保育の実態調査（2019年度全国保育士養成協議会学術研究助成、2020）においても、保育者から見る文化的に多様な背景を持つ子どもと保護者は、日本語が理解できない、日本の文化を知らないといった「できない」ことへの注目が高い。ここに、可能性に注目する捉え方を取り入れていけば、同調査で明らかになった保育者の「困り感」の軽減につながるのではないだろうか。オーストラリアの先住民に関する教育課題と同様ではないものの、異なる文化的背景を持つ子どもと家族が、その社会で有力な文化の中で生活するという点では、日本における文化的に多様な背景を持つ子どもと家族を捉える際にHIPPYの示唆は大きいと言える。

(3) 家庭訪問とチューター制度による家庭と地域における教育環境の充実

次に示唆が得られるのが、HIPPYの特徴である家庭訪問とチューター制度である。現在日本で実施されている文化的に多様な背景を持つ子どもと家族の支援の取組事例には、支援活動が展開される場所に子どもや家族が向かっていく形が多い。HIPPYでは、家庭の都合に合わせてながら、チューターの家庭訪問により子どもと家族の生活の場においてプログラムを実践し助言を得ながら、チューター不在時でも保護者がプログラムを実践できるように計画されている。外に出向いて学んだことを家庭に持ち帰って実践するのではなく、最初から家庭で学び家庭で実践する方法は、子どもと家族にとって利用のハードルが軽減され、家庭が教育の場であることの理解が促されるだろう。

チューター制度は、HIPPY利用経験者が研修を受けチューターとなり、同じ地域の新たなHIPPY利用者を援助する仕組みである。チューターとなる保護者の自信、地域への帰属感の醸成、雇用機会の創出が意図されているが、とりわけ、保護者の自信と地域への帰属感は社会経済的に不利な状況にある保護者にとって子どもへの教育的関わりへの原動力となる重要な効果であると言える。利用者とチューター双方が同じ地域に暮らす住民であり、チューター自身がHIPPY利用経験者、つまり、利用者と同様の背景を有することから、家庭での教育的関わりのもたらす効果を実感している当事者である。このピアサポートの関係性は、HIPPY利用者だけでなくチューターにも家庭での教育的関わりへの自信や地域への帰属感をもたらす機会となる。日本において社会の希薄化が指摘されて久しいが、日本社会において文化的に多様な背景を持つ家族が地域で孤立しがちであることが指摘されていることを考えると、地域の中で子どもの教育について共に考えてくれる存在、地域の中で貢献する機会を提供できる仕組みとして、HIPPYプログラムから学べることは多い。利用者が増えることにより地域における家庭での教育への関心が高まることも期待できる。

4. 結語

本稿では、文化的に多様な背景を持つ子どもの家庭での教育的関わりの充実の方策を探るため、オーストラリアでの実践事例を文献により検討し、示唆点を見出した。文化的に多様な背景を持つ子どもの家庭と保育施設をはじめとする地域での連携は、子どもの教育に関する内容にまで踏み込めていない現実がある。だが、石井他によるの多文化保育の実態調査(2019年度全国保育士養成協議会学術研究助成、2020)からは、子どもの出身国コミュニティでの支え合いが行われ、同じコミュニティの保護者が別の保護者の保育者とのやりとりをサポートする事例も見られた。こうした既存の関係性の資源を活かしながら、オーストラリアでのHIPPPYの実践から学べることを日本の文脈に即して創出し、子どもの家族と地域のもつ可能性を引き出し、支援の対象としての保護者像を超えたパートナーシップの構築が求められる。そのために、専門家である保育者、研究者、行政らが連携して家庭での教育的関わりの取組みの方法を創り出していく時期に来ている。

付記

本研究は、2020年度科学研究費(基盤研究C)『家庭養育と乳児保育の質の向上を促す家庭と乳児保育の連携プログラムの開発』(課題番号20K02643:研究代表者寺見陽子)の助成を受けたものである。

注

- 1) 本稿における「多様な文化的背景を持つ子ども」とは、「言語文化的に多様な子ども」「外国につながる子ども」「外国にルーツのある子ども」と同義として用いるものとする。文部科学省では、「帰国・外国人児童生徒」「外国人幼児等」「外国につながる子ども」等、保育所保育指針では「外国籍の子ども等」「様々な文化を背景にもつ子ども」等、使用される表現は多様であるが、国籍を問わず言語・文化的に多様な背景を持つ子どもを包含する意味を有する表現として本稿において採用した。

文献

愛知県、プレスクールの普及、愛知県公式サイト、2021年3月12日更新 (<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/0000028951.html> 引用日2021年12月8日)

Australian Government Department of Social Services (2019) Home Interaction Program for Parents and Youngsters (HIPPPY) Program guidelines 2019–2022 https://www.dss.gov.au/sites/default/files/documents/11_2019/home_interaction_program_for_parents_and_youngsters_-_programme_guidelines.pdf

Barnett, T., Roost, F. D., & McEachran, J. (2012) Evaluating the effectiveness of the Home

- Interaction Program for Parents and Youngsters (HIPPY). Family Matters, (91), 27-37 (<https://search.informit.org/doi/10.3316/aeipt.197380> 引用日 2021 年 12 月 1 日)
- Brotherhood of St. Laurence (2008) Helping parents and children learn together : Insights into the impact of a home interaction program. Brotherhood Comment April2008 (<https://library.bsl.org.au/bsljspui/bitstream/1/6942/1/commentapr08.pdf#page=14> 引用日 2021 年 12 月 1 日)
- Brotherhood of St. Laurence (2020) ENGAGING CHILDREN'S VOICES IN THE EARLY YEARS PRACTICE GUIDELINES (https://hippyaustralia.bsl.org.au/fileadmin/user_upload/News_and_important_information/Children_s_Voices/CVLT_Practice_Guidelines.pdf 引用日 2021 年 12 月 1 日)
- Brotherhood of St. Laurence (2021) Summary of the impact of HIPPY on children (<https://assets.bsl.org.au/assets/BSL-HIPPY-Longitudinal-Tutor-Research-2-page-Summary.pdf> 引用日 2021 年 12 月 1 日)
- Bryant, D. (2015). The prime provider model in practice: examining the roles and functions of HIPPY Australia (https://bsl.intersearch.com.au/bsljspui/bitstream/1/12462/1/Bryant_Prime_provider_model_in_practice_HIPPY_2015_unpub.pdf 引用日 2021 年 12 月 1 日)
- (株) 富士通総研 (2019) 我が国に生活・滞在する外国人の現状と外国人が生活・滞在する上での課題 (https://www.soumu.go.jp/main_content/000601286.pdf 引用日 2021 年 12 月 8 日)
- Goldstein, K. (2017) Five Decades of HIPPY Research: A Preliminary Global Meta-Analysis and Review of Significant Outcomes Final Report March 1, 2017
- 林悠子 (2020a) オーストラリアにおける多文化保育の制度的枠組みと実践. 佛教大学社会福祉学部論集, 16, 80-93
- 林悠子 (2020b) 外国につながるのある子どもの保育における家庭との連携の課題. 神戸松蔭女子学院大学教職支援センター年報, 5, 21-31
- 林悠子 (2021) 外国につながる子どもの保育における家庭との連携の課題: 子どもの言語発達の視点から. 神戸松蔭女子学院大学研究紀要, 2, 67-81
- Hippy International ホームページ(<https://hippy-international.org/about/> 引用日 2021 年 12 月 1 日)
- 石井章仁・韓在熙・林悠子・松山有美・三井真紀 (2020) 多文化保育とその研修に関する実態研究—保育者の「困り感」に注目して. 日本保育士養成協議会助成研究
- かながわ国際交流財団、外国人住民のための子育て支援サイト (<http://www.kifjp.org/child/> 引用日 2021 年 12 月 8 日)
- Krakouer, J.M. (2016) Taking Indigenous culture into account: a critical analysis of an early childhood education program for disadvantaged families. School of Social and Political Sciences,

Faculty of Arts at The University of Melbourne.

(<https://hippy-international.org/wp-content/uploads/2021/09/HIPPY-International-Literature-Review-FINAL.pdf> 引用日 2021 年 12 月 1 日)

厚生労働省子ども家庭局保育課 (2021) 保育を取り巻く状況について (<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000784219.pdf> 引用日 2021 年 12 月 1 日)

厚生労働省 (2021) 地域における保育所・保育士等の在り方に関する検討会取りまとめ (素案) (<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000857763.pdf> 引用日 2021 年 12 月 1 日)

Liddell, M., Barnett, T., Roost, F.D. and McEachran, J. (2011) Investing in our future: an evaluation of the national rollout of the Home Interaction Program for Parents and Youngsters (HIPPY) : final report

(https://library.bsl.org.au/jspui/bitstream/1/6182/1/Investing_in_our_future_HIPPY_National_Rollout_Evaluation_FinalReport_2011.pdf 引用日 2021 年 12 月 1 日)

Moyle, K. (2019) Literature Review: Indigenous early childhood education, school readiness and transition programs into primary school. Camberwell, Australia: Australian Council for Educational Research

長崎和則. “ストレングス視点”, 社会福祉用語辞典. 第9版. 山縣文治・柏女霊峰編集委員代表, ミネルヴァ書房, 2013, 223-224

OECD (2012) OECD 保育の質向上白書—人生の始まりこそ力強く : ECEC のツールボックス Japanese language edition, Organisation for Economic Co-operation and Development. Paris, and Akashi Shoten Co, Ltd., Tokyo 2019

Tapper, A., & Phillimore, J. (2012) Prevention-based approaches to social policy: The case of early childhood development. Evidence Base: A Journal of Evidence Reviews in Key Policy Areas, (2), 1–22 (<https://search.informit.org/doi/10.3316/informit.249365072974943> 引用日 2021 年 12 月 1 日)

(受付日 : 2021. 12. 9)